風化させない

71年目のヒロシマ ⑤

平和を願い奏で続ける

被爆樹木で作った笛

「あの日もこんな暑い日だったみたいですね」。71年前に広島に原爆が投下された8月6日、広島市内をタクシーで移動中、運転手が言った。見上げれば青々とした空が広がり、強い日差しが降り注いでいた。この時期の広島は、不思議と風がぴたっと止まる「凪(なぎ)」になるという。

広島県内の小中学校は6日が登校日になっており、各校で平和のつどいを開く。今年もじっとしているだけで汗が噴き出すほどの暑さの中、子どもたちは71年前に思いをはせた。

建物疎開の作業に出ていた教師3人と児童41人が亡くなった千田小学校（同市中区）では、全児童623人が、平和記念公園(同)で開かれていた「原爆死没者慰霊式・平和祈念式」をテレビ中継で見守っていた。被爆しながらも折り鶴を折って回復を祈った佐々木禎子(さだこ)さん（12歳で他界）に関する歌の朗読もした。

終了後、同校の合唱部43人は平和記念公園内の広島国際会議場で開かれた「ひろしま子ども　平和のつどい」に参加した。

平和への思いを込めてパンフルートを演奏する児童＝広島市中区の国際会議場

部員たちが伴奏に使ったのは、長さの異なる数本の管をいかだ状に束ねた「パンフルート」と呼ばれる笛。原材料は同校の校庭に植わっていたカイヅカイブキの木だ。

校庭には、子どもたちを見守るように71年前の原爆の惨禍を生き抜いた17本の木が立っていた。昨年、カイヅカイブキ1本（約6メートル）が枯れてしまい、伐採せざるを得なくなった。「処分してしまうのはもったいない」と、庄野英憲校長らは活用方法を模索。知人の提案で、「パンフルート」と呼ばれる笛を作ることにした。笛の作家に依頼し、パンフルートが50個できた。

「平和のつどい」では、合唱部の岩佐真緒部長(12)＝同小6年＝が発表に先立ってあいさつし、思いを訴えた。「パンフルートの演奏を通して、世界中に命の尊さと平和を未来へ向かって語り継いでいきます」。

続けて、原爆で命を落とした人の冥福を願う「アメージンググレース」と、同校の卒業生が16年前に作詞作曲した「アオギリのうた」をパンフルートの演奏と合唱で披露した。

庄野校長は「校庭の木が、形を変えて大切な教材に生まれ変わった」と話した。

現在、同校では合唱部だけでなく高学年の児童が音楽の時間にパンフルートを練習している。学校の新たな伝統、平和を願う象徴となるよう、児童たちは優しい音色を奏で続けていくつもりだ。

（鳴門支局・大城咲）